

〔博物館展示批評〕

弘前市立博物館リニューアル常設展

瀧本 壽史

一 市民の期待と課題

平成二十八年（二〇一六）四月、弘前市立博物館常設展がリニューアルされた。同館は周知のように、昭和五十二年（一九七七）四月に弘前城跡の三の丸の一角に開館して以来、弘前藩に関する歴史資料や美術工芸品を多数収集・保存・展示し、地域文化発展の中心的役割を担ってきた青森県を代表する歴史系博物館である。

開館以来実に約四十年ぶりの全面リニューアルであり、その展示内容がどのようなものになるのかが注目されていた。しかも、展示スペースや展示ケースがほとんど変わらない中での展示替であり、展示方法にも関心が高まっていた。加えて築城四百年祭や天守の曳屋工事など、最近の弘前城への市民の関心の高さに応えながらどのようにこの四十年間の研究成果を展示替に生かしていくかは、監修の長谷川成一氏（弘前大学名誉教授）をはじめ、同館スタッフら関係者にとっては相当なプレッシャーとなっていたはずであった。

これまでの展示は、主として歴代弘前藩主の事績を紹介していく近世中心の展示であった。ただし、それはそれなりに、弘前藩と城下町弘前

の特質を見いだすことができる充実した内容であり、展示品の質も高いものであった。

しかし、この四十年の歴史研究の進展と考古学的発見は、弘前の歴史の奥行きを広げ、そのことを一つの抛り所としながら、弘前市民の間においても未来に向けて発展的に弘前の歴史を見ていく意識が醸成されてきた。端的に言えば、弘前の歴史を原始から見えていきながら、その未来を考えていくようになったのである。この弘前の歴史を時系列に沿って把握し、未来を見据えていきたいという市民のニーズに応えることが一番の課題であった。

二 テーマ展示の採用

これまでと同様の展示スペースと展示ケースの中で、今回この課題に応えるために採用されたのはテーマ展示であった。それぞれのテーマを順次見ていくことで原始から近現代までの弘前の歴史の流れを把握すると同時に、来館者一人一人の興味関心にも応えられるようにしたのである。この手法はテーマ設定と展示資料選定において大変難しいものであり、関係者の歴史観や、時代と地域を見る目が問われることになる。結果、このテーマ設定の成功が本リニューアルを成功に導いた。各テーマは以下紹介するように四十年間の研究成果をもとに、見事に各時代を切り取っていたからである。研究成果については主として『新編弘前市史』と『青森県史』の編纂過程において明らかにされてきたものであるが、監修者の長谷川氏がこれらに中心的に関わっていたことも、的確な

テーマ選定につながったものと思われる。もちろん、同館職員が日常的に来館者の声に真摯に耳を傾けていたこれまでの博物館活動の成果でもあった。

リニューアルされた常設展は「ひろさきの歴史と文化」原始から近代へ」の大テーマのもと、次の十二のテーマで構成されている。

縄文時代 ①幾何学文様と十腰内文化

②まつりと祈りの場／ストーンサークル／

弥生時代 ③稲作の伝播と北限の水田跡

古代 ④古代集落の形成と蝦夷

中世 ⑤日本海交易と中世城館

中世／近世 ⑥津軽氏発展と城の移り変わり／大浦城、堀越城から弘

前城へ／

近世 前期 ⑦藩政の成り立ちと城下町弘前の発展

後期 ⑧藩政のゆらぎと文化の興隆

近現代 ⑨維新の激動と近代都市弘前の形成

⑩軍都から学都弘前へ

⑪りんご産業の成立と市域の発展

民俗 ⑫民俗行事と人々の暮らし

次にそれぞれの展示内容と工夫された点について述べていくことにする。

三 工夫された展示内容

弘前市内には岩木山麓を中心に多数の遺跡が分布しているが、①では北東北を代表する縄文後期の十腰内（2）遺跡、②では全国的にも珍しい大型のストーンサークルが発見された縄文晩期の国史跡大森勝山遺跡を取り上げている。弘前市民の誰もが目にすることがあり、同館のマスケット「いのうち」となっている重文の猪形土製品を最初に展示しており、弘前の歴史を原始から解き明かしているという意図が読み取れる。③では砂沢遺跡を取り上げ、砂沢の人々が縄文的な生活を営みながら試験的に稲作を行っていたことに言及するとともに、遠賀川系土器と砂沢式土器などにも触れ、北限の稲作文化を紐解いている。

④では笹森館遺跡を取り上げ、古代、蝦夷と呼ばれた人々の有り様に迫っている。同遺跡から出土した馬の線刻画土器から『扶桑略記』にみえる馬産地としての津軽に触れ、また『日本書紀』にみえる阿倍比羅夫の北征から、大和朝廷と津軽蝦夷社会との関わりを分かりやすく示している。⑤では境関館を取り上げている。津軽安藤氏との関わりが深く、十三湊から岩木川、平川を経由して内陸部に物資を供給する中継地として機能していたとし、中国産の青磁碗・白磁皿など交易がもたらした出土品や、安藤氏と関わりの深い長勝寺の嘉元鐘や板碑を紹介しながら、中世の中に弘前地域を位置づけている。

⑥から津軽氏が登場する。国史跡津軽氏城跡が弘前城跡だけではなく、種里城跡（鯉ヶ沢町）・堀越城跡の三つの城跡からなること、さらに弘前城跡が弘前城・長勝寺構・新寺構から構成されていることを確認することで近世の導入としている。天和四年（一六八四）の堀越村書上絵図（複製）は、近世に入り廃城となった堀越城跡が村の中でどのような位

置づけにあったのかを探る上で興味深く、近世移行期の歴史を象徴的に示すものである。

近世⑦⑧は展示スペースが従来の三分の一程度となったものの、弘前藩政を時系列的に大きく崩さずに本州北端の藩としてのその特質を分かりやすく提示し、従来以上に弘前藩の変遷をしっかりと捉えられるようになった。その大きな理由は、ほぼ十八世紀を境に⑦と⑧に分けられているものの、⑦⑧がともに「城と町」の有り様に集約される形で展開されているからだ、展示を見ていて実感できる。築城、町割り、家臣の召し放ちや郭外移転、寛政改革期の藩士の在方移住と空き屋敷、天守の再建、等々「城と町」の様相の変化が、幕藩関係、家中騒動、支配機構の整備、産業の振興、凶作・飢饉、蝦夷地警備等の藩政の主要な事柄と関係づけられながら語られているのである。城下町の建設、変質、そして移り変わる景観は、まさに近世弘前の歴史的所産であった。城絵図、町絵図、領内図の適切な配置がこのことの理解をさらに助けている。城下町弘前に所在する博物館でなくてはできない展示ストーリーであり、来館者は弘前の地で弘前の歴史に触れながら、北東北、そして日本の歴史にも、自然と意識が向けられていくようになっていく。⑦⑧にはもう一つ見逃せない工夫がある。近現代との関係づけである。文化の興隆や、稽古館と教育等は「学都」、アイヌ民族対応を含む北方警備関係は「軍都」につながる展示内容を含んでおり、時系列的にもテーマ選定においても実に効果的であった。

近世の最後に「弘前城を探る・見る・掘る・触る」と題して、弘前城出土丸瓦・擬宝珠・十手などに気軽に触れられるコーナーが置かれて

いる。「学習」の連続から一瞬解き放たれたこのほっとした空間は、次の近現代に向かう気力を回復させてくれる。

近現代⑨⑩⑪は基本的には明治・大正期が中心であり、昭和期の戦争や戦後の現代に関する事柄はなく、「近代」の展示といえる。ただし、そこには大きな意図が感じられる。現在の弘前に視点を当てるならば、その基礎が作られたのは明治・大正期であり、太平洋戦争によって弘前市街地が大きく破壊されることもなかったからである。近世の城下町弘前が現在の姿にどのようなように変容してきたのかに絞る、そのことを検証していくことの方が意識が散漫にならず、近世から現代に至る本来の都市弘前を理解しやすい。「近現代」と銘打ったのもこのためであろうし、テーマ設定に意を尽くした結果でもあった。

⑨では明治維新後の政治動向を整理したものであるが、津軽の自由民権運動を紹介する中で藩校稽古館の系譜を引く東奥義塾を取り上げ、⑩の伏線としている。⑩は近代弘前の代名詞ともいえる「軍都」と「学都」を扱っている。そこには青森との確執が見え隠れし、弘前市民の思いが見いだせて興味深い。広大な用地を要する第八師団の様々な軍事施設は弘前市及び周辺に置かれたが、終戦後そこには小・中・高等学校が建ち、弘前は今も「学都」としてあるのである。⑪は様々な産業が興る中で、りんご産業に的を絞ったのは卓見である。初期のりんご栽培を担ったのは旧弘前藩士族であり、菊池楯衛が中心となって結成した「化育社」は、後に津軽産業会となって産業全般にわたって大きな役割を果たしていく。津軽における農業はじめ諸産業の中心都市としての弘前の地位はまさにりんご産業から始まったのであり、りんご栽培が弘前市街

から郊外や傾斜地に拡大していった過程は、都市弘前の拡大でもあったのである。

締めくくりは民俗⑫。近年の自治体史のほとんどが民俗を取り上げるようになり、研究の蓄積が進んだことによる。⑪と同様に扱う内容を絞り込み、ねぶた、弘前八幡宮祭礼、お山参詣といった弘前・津軽の象徴的民俗行事を近世の姿から説き起こし、この地域に生活してきた人々の息吹を感じさせてくれる。

常設展の出口付近に、大正から昭和三十年代までの弘前城や観桜会の様子が撮された手作りの写真パネルが二十五枚程掲げられていた。季節によって替えるのだろうが、弘前公園内にある博物館として細やかな心配りであり、気持ちよく会場を後にすることができた。

四 今後への期待「開かれた博物館」へ

リニューアルを終え、同館は今後どのような博物館を目指していくのだろうか。

展示室に入る前の小径のような空間は、その先に何があるのかを想像させるわくわくするような一種のタイムトンネルである。今回そこに置かれたのは、主に文化財に指定された弘前市の代表的な建造物の写真パネル三十数枚と、その位置を落とし込んだ弘前文化財マップ、そして、約一万三千年前の大森勝山遺跡から二〇一五年の天守の曳屋までの年表であった。派手さはないが、文化財の位置関係と年表によって空間と時間が融合され、また弘前市民にとっては周知の文化財をまず目にするこ

とで、自身の知識と認識を再確認しながらさらに深めていこうとする意欲を起こさせると同時に、奇をてらわない、まじめな展示であることを予想させる。これまで以上に弘前市民の博物館としてあり続けたいという趣旨がよく伝わってくる。

展示会場に入った瞬間「変わったな」という印象を持った。展示パネルがカラフルな上に、非常に簡潔明瞭な文章で写真も大きく入り、見やすく分かりやすかったことがその理由であろう。同様に資料説明のキャプションも大半が三、四行と簡潔で文字も大きく、振り仮名も全てに振られていた。観覧対象を子どもに合わせたのだろう。子どもに合わせるということは、すぐれて自主的・協働的学習、学びを深める学習を意識した展示であるということでもある。実はこのことは、決して大人や研究者を意識しないということではない。そこには興味関心を深め学習意欲を高めていくための「なぜ、どうして」という問いかけと解答らしきもの（現時点での研究成果）が隠れているからである。その意味で、学校での授業としても十分活用できるものである。学習活動の一拠点としての役割を博物館活動の大きな柱として担っていき、という強い意図が感じられる。

子どもを対象とすることは、導線を分かりやすくすること、目線の高さを低くすることでもある。そしてそれは、高齢者、車いす使用者等への配慮にもつながっている。

テーマ展示を採用するとともに、このような展示技術面での刷新から窺われることは、同館が「開かれた博物館」を今まで以上に目指しているということではないだろうか。市民に真摯に対応し、市の将来を担う

子どもたちが親しみやすいように工夫し、さらには高齢者や障がいのある方々に配慮するとともに、最新の研究成果を組み込みながら多様な観覧者の知的欲求に応え得る展示替に取り組んだのが、今回のリニューアルだったのである。

リニューアルに関わった方々の叡智と努力に敬意を表するとともに、目指す「開かれた博物館」に向けた今後の様々な活動に期待したい。最近刊行された『常設展展示図録』はこの大きな力となるはずである。県内の他の博物館においても、今回の弘前市立博物館の取り組みを大いに参考にしてほしいものである。

(たきもと・ひさふみ 弘前大学教育学部准教授)